

---

# 五神の国 光る螢の舞う空で

雪虫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

五神の国 光る螢の舞う空で

### 【NZコード】

N1363W

### 【作者名】

雪虫

### 【あらすじ】

剣と魔法、そして科学によってチカラを示す世界。そこには、五つの大国があつた。人間が支配し、科学の発展した【賢の国】。エルフが支配し、伝統を重んじる【巧の国】。魔族が支配し、魔法の熾える【魔の国】。獣人が支配し、決闘の止まない【武の国】。万人が闊歩し、平等を掲げる【和の国】。五つの国は互いを牽制し合い、【和の国】を除いて合い間見えることはなかつた。賢の国の東にある小さな村。そこに、とある少年がいた。企画『五神の国』の作品です。

## 村人A（前書き）

これは、企画『五神の国』の小説です。  
読む前に、ゴーザページのリンク先のホームページにある【世界観】  
を拝見願います。

村人A

賢の国の東。

即ち東方と呼ばれる地域に、シナンという小さな村がある。その町の、木製の柱に畳、障子とわびさびを感じさせる家の縁側に、柱に体を預けて寝息を立てている少年がいた。

小柄で、東方出身の人間であることを示す黒髪は肩まで伸びている。かなりの優男で、一見すると女性のようだ。

彼の元へ歩み寄る少女がいた。

女性にしては長身で、少年と同じ黒髪はうなじが見えるほど短い。これまた東方の特徴である黒い瞳は、少女の気の強さを象徴するような釣り目に佇んでいる。

性別から何まで、少年とは正反対な少女だ。

「ホタル！ こんな所で寝てるんじゃないわよ！」

と、少女はホタルと呼ばれた少年を揺さぶりつつ声を投げつける。しかし、ホタルは微動だにしない。

「ちょっと！ 起きなさいたら！」

少女は揺さぶりを激しくするが、ホタルは未だに目覚める様子はない。

「このの

少女はホタルの手を握ったまま背を向け、姿勢を低くする。そして

「起きろって、言ってるでしょーがーーー！」

「かはっ！」

見事な一本背負いが決まった。

「痛たた……。煉、頼むから普通に起こしてよ  
「普通に起こしても起きなかつたじゃない」

レンと呼ばれた少女は何故か得意げに言つ。

ホタルとしては、そう言わると立つ瀬<sup>瀬</sup>がなかつた。

「どうか、アンタちゃんと寝なさいよね。夜によ、夜に…」

「寝てるつてば。でもさ、今日みたいに気持ちのいい天氣だと、何か眠くなるんだよね」

「アンタってほんとお氣楽よね…」

まあいいわ。それより、今暇でしょ?..

レンがこの言葉を発して碌な田にあつたことはない。だが、さつきまで居眠りしていたホタルが暇じやない、と言つには少々、とうかかなり無理があつた。

「うん、まあ、ね」

「だつたらさ、薪取つてきてくれない? 後少しでなくなりそうなよ」

薪集め、か。

少々面倒ではあるが、それだけだ。別に断る程のことではないだろ? もっとも、元々ホタルに拒否權などありはしないのだが。

「わかったよ」

「本当に? ありがとう、助かるわ。」

自分で取りにいきたいんだけど、今日は忙しくつてない

レンは鍛冶屋の娘である。十七といつ若さでぞらに女だとうのに、もう一人前と言つても遜色のない腕前で、既に顧客が付いているのだ。

「そつか。相変わらず大変そうだね」

「大変そうじやなくて、大変なの」

「はいはい。それじゃあ、早速僕は森に行くね」

「いつてらつしゃーい」

と、ホタルはレンの出迎えられながら、薪を集めるべく村の近くにある森へと向かつた。

薪の束を抱えながら、手頃な枝を探すホタルを見つめる一いつの日があつた。

息を潜め、獲物に気配を悟られないようにして見つめ続けるソレ。ホタルが枝を見つけて屈んだ時、ソレはホタルに飛びかかった。ソレは狼だつた。しかし、ただの狼ではない。

隊長は裕に二メートルもあり、一つ一つが刃のような牙を持つ。怪物と呼ばれるソレだつた。

人間やエルフ、果ては獣人に魔族までをも無差別に襲う化け物。その凶暴性は敵エネミーという俗称に劣らない。

狼の牙がホタルの目の前まへと言つても、向けているのは背中だが、に迫る。だが、ホタルは寸前で身を翻すことによつて衝突を避けた。

狼は負けじとすかさずホタルに飛びかかつたが、またもやさつと避けられ、続いて腹部に強烈な蹴りが入つた。

狼は体制を崩し、大きく横に倒れる。

ホタルは狼に向かい、独り言のように呴いた。

「途端、雷イカヅチが迸り、狼は体を大きく震わせ、やがて動かなくなつた。自らの体内にある魔力を変換し、現象として現れる。魔法、とう現象である。

「……あー、やつぱレンに頼みごとされると碌なことがないなあ」ホタルはそう呴いた後、落とした薪を拾つて、何事もなかつたようには枝集めへ戻つた。

ところで、魔法とは魔力を変換して自身のイメージ通りの現象を起こす手段である。

イメージを確実に再現するために、大抵の魔法は詠唱スクリプトが必要になつてくる。

メジャーな魔法には汎用の詠唱スクリプトがあり、上級の魔法使いは熟練に

よつて改変したり省略したりする。

だが、詠唱<sup>スクリプト</sup>を完全に省略し、魔法の名称のみで実用レベルの魔法のイメージを構築できる魔法使いは大陸中に数えるほどしかおらず、少なくともただの村人が使えるようなものではない。

それだけの話である。

## 少女は前進する

森の中、長剣を携えた少女がいた。

流れのような金髪に、全てを見透しているような蒼眼。全体的に細く、凛とした顔つきをしている。

彼女に対峙する者がいた。人ほどの体格を持つ大蜘蛛である。少女は長剣を鞘から抜き、地面と水平にして構える。腰を少し下ろして、途端、駆けだした。

大蜘蛛は迫つてくる少女へ向かって、白い糸を吐いた。少女の腕程の太い糸だ。

糸は少女の四肢を絡め取り、彼女の動きを封じる。

粘着性があるのか、いくらもがいても振りほどけない。

少女は振り払うのを諦め、敵に向かって前進した。

糸が彼女の歩みを邪魔する。だが、それでも彼女は足を止めない。少女は全身に力を込めて、再び前へと踏み出す。

ブチッ、という音が連鎖的に聞こえる。音が止んだ時、彼女の歩みを邪魔するものはなにもなくなっていた。

大蜘蛛はまた糸をまき散らす。だが、少女はすでに眼下へと詰め寄っている。

長剣が大蜘蛛に突き立てられた。

＝

ホタルはその日、一人でシノンに隣接する森に来ていた。

昨夜、レンは徹夜で剣を鍛え、疲れて今も熟睡している。

期限ぎりぎりまで仕事を放つておいたレンの自業自得な訳なのだが、幼馴染としてハーブティの一つでも振る舞つてやろうという労ねぎら

いの気持ちから、そこへハーブを摘みに来たのである。

と、森に入つてから数分。うつ伏せで倒れている少女を発見した。

「だ、大丈夫ですか？」

ホタルが少女の体を起こすと、彼女の風貌がはつきりと見えた。流れのような金髪に、全てを見透しているような蒼眼。全体的に細く、凛とした顔つきをしている。

少女は薄く開いていた瞳をまた少し覗かせ、呟くように囁つた。

「お腹……空いた……」

曇過ぎ、レンは大きな欠伸をしつつ起床した。

全身がだるい。徹夜なんてするものではない。いつも徹夜の後にはそう思つているのだが、ビリしても後回しにしてしまうのだから仕方がない。

レンは布団をどかせ、立ち上つて天井に向かつて手を組みながら背伸びをする。

さて、と頭の中でそう咳き、お隣のホタルの家へまっすぐ向かう。あの幼馴染のことだ、いつものように気を利かせてハーブティを用意してくれているのだろう。レンの好みに合わせてブレンドされたそのお茶も、彼女が徹夜せざるをおえなくなるまで仕事を放置させる原因の一つかもしれない。

ついでに何か作つてもらおう、と仮定的な幼馴染のエプロン姿を思い浮かべながら、レンはホタルの家の玄関を潜つた。

「ホタル、お腹空いたー。何かつく……て？」

レンの目に映つているのは、音を立てず上品に、しかし物凄い速さでテーブルに並ぶホタルの手料理と思われるものを平らげている金髪の女。

視線をすらすと、シンプルな緑のエプロンをしていて、二コ一二しながら無言で食べ続ける女を見ている幼馴染。

思考が止まつた。世界が凍りついているかのような感覚。視線を戻す。そこには見知らない女。

視線をずらす。そこには見知った幼馴染の男。

期待していたハーブティは見当たらない。ホタルが結局ハーブを摘み損ねたことをレンは知らない。

レンが未だに固まつていると、ようやく気付いたのか、ホタルが立ち上がりて彼女の方を向いた。

ホタルのニコニコした顔に向かい、レンは、

「あ、おはよぶはつ！」

思いつきり、蹴りを放つた。

ホタルはレンの蹴りこみにより一メートルほど弾き飛ばされたが、割とよくある日常茶飯事なので、慣れにより直ぐに復活した。

「あ、ああああんた、何ウチが寝ている間に女の子連れ込んでるのよー?」

「へ? ああ、この人、森で倒れてたんだよ」

「それで無理やり手攻めにしたっていうの!? あ、あんた、普段女みたいな癖にそいつ所だけ変に男みないなの!?」

「いや、手攻めって。僕は別に何も……」

「言い訳なんて聞きたくない! 処刑よ処刑! その腐った根性、叩き直してあげ」

「うるさいわね」

と、ホタルとレンの言い合いに割つて入る声があった。凛としていて、ハッキリと聞こえる声。

「あたしは食事中なのよ? 側で騒がないのが常識とこいつものじやないかしら?」

それは先程まで料理を食べていた金髪の少女のものだった。

因みに、テーブルにならんでいた品々は綺麗になくなっている。

「は? 何よ、食べさせてもらつている分際でその態度は? 何様のつもり?」

食べさせていたのはホタルで、むしろ自分も食べ物を頂こうとしたに来たレンにそんなことを言う資格などなかつたがずなのだが、誰もその件には触れなかつた。

「待ちなさい」

と、再び凛とした声が響く。

「あたしに抗議したいことがあると申つなら、これで語りなさい」

「そう言って、少女は壁にかけてある長剣を指さす。

「……へえ、上等じゃないの」

レンもすっかりその気になってしまったらしい。

「いや、あの……ハア」

いつの間にか蚊帳の外になっていたホタルの溜息が、場違いに響いた。

外のそれなりにスペースのある場所で、二人の少女は対峙していった。

レンは仕事用のハンマーを左手に持ち、手をだらんと下げた自然な構え。

金髪の少女は長剣を水平に構えている。流石に自重したのか、剣は鞘に収まつたままだ。

「そういえば、まだ名前を聞いていなかつたわね。ウチはレン。あんたは？」

「あたしはそうね」と、一拍置いて、

「ソティイよ

と答えた。

「そう。じゃあソティイ、最後まで立つていた方の勝ち。いいわね？」

「わかつたわ。それでいきましょう

それで会話は終わり、静かな空気が流れる。

勝負が始まつたのかな、と事態についていけないホタルは離れた所で、他人事のようにそう思つた。

ソティイが腰を少し落とし、レンに向かつて駆けだす。レンは動かず、ソティイをじっと見続けている。レンの手前まで来て、ソティイは剣に添えていた左手を離して右手を突きだす。片手突き、の動作。それに対し、レンは突きが届く前に長剣の腹の部分をハンマーで軽く叩く。コン、という音がし、切つ先が軌道が大きくずれていく。ソティイはそれによつて体制を崩した。そこへ、レンは右ストレートをソティイの腹に叩きこみ、彼女を2メートルほど飛翔させた。

ホタルは、国家兵士試験に受かつて今は村にいない弟とそれなりの頻度でくらつていたそれの痛みを思い出し、苦い顔をしながら勝敗は決したと判断した。が、それはまだ早かった。

地面に叩き出されたソティはすぐに起き上がり、再び突進する。そして、またもや片手突きの構え。油断していたレンは動作が少し遅れたが、立て直してもう一度右ストレートを放つた。リーチの長いソティの長剣の鞘が先にレンの胸の中心に突き刺さり、数瞬遅れて右ストレートが入つた。両者ともに弾きとばされる。着地してすぐレンは起き上つたが、ソティは地に体を投げ出したままだつた。結果としては、実践を想定した試合と見れば先に長剣が突き刺さつたソティの勝ち、純粹な勝負と見れば最後まで立つっていたレンの勝ち、という、曖昧なものとなつた。が、当の本人達はといふと、「いいパンチだつたわ。まだ足が震えてるわよ」

「アンタこそ、ウチの右ストレートをまともにくらつて直ぐに立ち上がれた人なんて始めてよ」  
とてもナチュラルに打ち解けていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1363w/>

---

五神の国 光る螢の舞う空で

2011年10月8日03時20分発行